

思ひ草

國學院大學人間開発学部教育実践総合センターだより

第50号

令和8(2026)年7月7日 発行

『思ひ草』創刊50号を迎えて

『思ひ草』は本号で創刊50号を迎えました。人間開発学部設立が平成21年4月ですので、平成22年2月の創刊号以来、学部と共に16年余の歩みを重ねてきたこととなります。これもひとえに、原稿をお寄せくださった教員・学生・卒業生の皆様、編集作業に携わられたセンター運営委員の先生方、そして本センターの活動を支えてくださった関係各位のご協力の賜物であり、ここに篤く御礼申し上げます。

さて、これまで教育実践総合センターでは、①教育の現代的な課題について、研究者と現職の先生方が共に学ぶ『夏季教育講座』に代表される教育臨床研究とその社会還元事業、②教育実習、介護等体験に参加する学生への相談支援および教育インターンシップの運営といった学生支援事業、の二つを柱として活動を行い、『思ひ草』はこれら事業内容の紹介と学生による参加記録の公表の場として、その役割を果たしてきました。

しかしながら、本学部の教員養成機能を強化し、教職志

おた なおゆき
学部長 太田 直之



望の学生への支援をより充実させるため、令和8年度より学部の教職支援体制の再構築を進めることとなり、センター事業の内、②の学生支援事業は新組織に移管し、教育実践総合センターは教育実践および教育臨床に関する研究推進とその社会還元を主たる役割とする機関として再出発することとなりました。

なお、新しい教職支援組織では、教育現場での実践経験豊富な教職顧問5名を新たに配置するとともに、従来の教採試験サポート室と統合し、新たに「たまプラーザ教職支援室」を設置しました。これにより、総勢9名の教職顧問が学生をサポートする体制がスタートしています。

このように教育実践総合センターの在り方は従来とは変わりますが、『思ひ草』はこれまでと変わらず、教職を目指す学生たちの実践経験や学びの過程を発信する場として刊行を続けてまいります。今後とも人間開発学部の教員養成にご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

「教育実習」に思う

たかやま まこと
教育実践総合センター長 高山 真琴



なんと今年は6月はじめに台風襲来！関東各地の多くの教育機関は、台風が到達する前日に「翌日は全日休校」の通知を出したと聞きました。教育実習真っただ中の学生たちはどうしているだろうか？と思いを馳せながら、「有事が予想される際の対応や危機管理を学ぶよい機会と捉え、無事実習を全うして欲しい」と、自身も在宅勤務をしながら考えていました。

本学部の教職課程を履修する学生のほとんどは、2年次に教育インターンシップを履修し、子どもや学校現場を体験してのち教育実習に赴きます。「自分のクラスの子どもたち」と「先生」として過ごしてきた学生に何を実習から得たかを問うと、「子どもをみること」との答えが多く聞かれます。学生は子どもたちとの関りの中で、また子どもたちをみる先生方の言葉から、「見・視・観・察」に示される同じものをみる際の質的な階層のどこに自分の「みる目」はあるのだろう、ということを考えるようになったの

だと思います。「子どもをみる」とは、子どもの様子にその背景を考え、みえないものをみようとする。多様な子どもを包摂するクラスの担任として、子どもをみる目がいかに大切かを実感したのだと思います。

さて、学部開設以来「ヒトを育てる人になる」を標榜し、学生と教職員が一体となって歩んできた結果、令和7年度の学部卒業生の内、約56%が教育、保育、福祉の現場に巣立っていきました。学科別にみると、初等教育学科からは約83%、健康体育学科からは約23%、子ども支援学科からは約71%の学生が、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校など、ヒトを育てる場で社会人としての第一歩を踏み出しています。教育実習で教師としての洗礼を受けながら、教職を目指す決意をした学生たちには心からのエールを送りたい。そして「ヒトを育てる人」として、大きく成長して欲しいと願うこの頃です。

保育実習

まなざしが育つ

子ども支援学科 教授 野澤 純子



施設実習では、学生は障害児施設や乳児院、児童養護施設などで実習を行う。障害児施設の実習に行く前、学生は「障害のある子どもとうまく関われるだろうか」と不安を抱いている。しかし、実習を終えた学生の言葉は、その不安とは少し違うものとなる。

学生は最初、不安をもって子どもと出会う。声かけに反応が薄い、落ち着きがない、同じ遊びを繰り返すといった、気になる姿ばかりが目に入り、対応に戸惑う。その中で職員から「初めての人や場所が苦手」「活動に集中している」といった、その子ども背景や思いを教えてもらおうと、行動が違って見えてくる。

そして、実習を重ねると、「この子は何を伝えようとしているのだろう」と考えるようになる。その過程では、保育士や心理職など多職種の協働を通して、多視点で子どもを理解することを学ぶ。やがて、子どもと共に過ごし、子どもから学ぶ姿勢が育まれていく。施設実習は、保育技術を身につけるだけでなく、自分の見方が変わることを通して、人間観を育む経験にもなる。

保育実習を重ねるなかで、学生は子どもと向き合い、保育者としてのまなざしを育てていく。一つひとつの経験を通して、子どもを「支援する対象」としてではなく、自ら感じ、考え、表現し、今を生きる一人の人間として尊重する姿勢を身につけてほしいと思う。そして、子どもと向き合う経験を通して、人と共に学び、人と共に育つ保育者へと成長していくことを願っている。

その学びは、大学の教室だけでは得られない。子どもたちと真摯に向き合い、日々の実践を惜しみなく伝え、学生の成長を支えてくださる実習施設の先生方の存在があってこそ実現するのである。日頃よりご指導くださる実習施設の皆様に感謝申し上げます。私たち養成校教員もまた、実習施設や子どもたちから学び、その学びをこれからの保育者養成に生かしていきたい。

トライアンドエラーから学んだこと

子ども支援学科 4年 藤澤 咲愛

2回目の保育実習は、公立保育園でさせていただきました。1回目の保育実習では3歳児以降のクラスに入らせていただいていたことから、2回目の保育実習では私の要望を考慮していただき、0～2歳児のクラスで実習を行わせていただきました。実習中には2歳児クラスで部分実習をさせていただける機会がありました。事前に担任の保育士の方と打ち合わせをし、準備を十分にしたつもりでしたが、予想をしていなかった子どもたちの反応への対応や緊張から視野が狭くなり子どもたちを待たせてしまう時間が出来てしまったり、先生方に助けていただいたりする場面がありました。しかし子どもたちは私の考えた活動を楽しみながら取り組んでくれました。2歳児ということもあり活動への参加は強要せず、興味を持ってくれた子が自ら参加できるようにしましたが、結果的にはその日出席していた子どもたち全員が活動に参加してくれました。制作物を持って帰って保護者の方と遊んだ子もいたようで、「とても嬉しそうでしたよ」と保護者の方から伺った際には、大きな喜びと達成感を感じました。

児童養護施設での実習では、子どもたちとの年齢が近かった点から距離感や、関わり方に難しさを感じましたが、毎日の挨拶や、私自身の趣味の話をする中で少しずつ距離が縮まり、子どもたちの方から声をかけてくれるようになりました。この経験から、信頼関係構築には相手のことを理解しようとしている姿勢だけでなく、自分自身を知ってもらうことも必要であると感じました。

実習を経て子どもたちとの関わり方や保育士・施設職員の方々の工夫を実際に目で見て学ぶことができました。特に、児童養護施設の職員の方から伺った「トライアンドエラー」という言葉が印象に残っています。保育の現場では思うようにいかず悩むことも多くあると思いますが、トライアンドエラーを繰り返し、自分自身の成長につなげていきたいと思っています。

ようこそ！教職顧問の先生方



増田 伸子

夢の続きを歩く

教職支援室、教職顧問の増田伸子です。私は横浜市中で小学校教員、指導主事、校長職を務めたあと、教育委員会で経営責任職として勤務しました。

幼い頃から教師になるのが夢でした。夢叶って子どもたちと過ごし成長を感じられることは、大きな喜びであり、やりがいでした。

また、教育行政での勤務は、違う角度から学校や教育を考える貴重な経験となりました。学校にいたとき以上に、「教育という営みは子どもたちの今と未来を創る尊いものである」と実感しました。

國學院大學で、教師になりたいという夢を抱く学生たちを支援すること、それは私の夢の続きとなりました。万葉の小径になぞらえ、夢の続きの小径を歩いていきます。



松原 保

教職顧問の松原 保です。神奈川県立の公立中学校で教員生活をスタートし、中学校保健体育科の教員として24年間、教育委員会での教育行政職員として10年間、中学校長5年間を経て、今春より教職支援室に着任いたしました。

学生の皆さん一人ひとりと誠実に向き合い、教員を目指す学生の皆さんが教職に就く夢を実現できるように、全力で伴走してまいります。

どうぞよろしくお願いいたします。(^^)/



西ヶ谷 郁子

私は、元来人見知りである、と自身を分析しています。周りの人の話を聞くことが楽しいタイプです。しかし、今は自ら自然体で喋っていることにチョット驚いています。

都心の幼稚園・小学校は3階に園庭・校庭があることも珍しくありません。ビルの谷間から見上げる空は四角くて狭いのです。ここでは空を遮るものはなく、万葉の小径では様々な草花が訪れる人を迎えてくれます。自然を感じられる空間、優しく親切な皆様に囲まれ、心地よく仕事をしています。それが私をお喋りにしているように思います。

学生たちの成長と、四季の移ろいを味わいながら「上善如水」の言葉を大切に、役割を果たして行きたいと思っています。



礒部 恒雄

管理職として2年目の夏、平成28年7月26日、神奈川県立の障害者支援施設で19人が死亡し、27人が負傷するという大変痛ましい事件が発生しました。マスコミは偏見や差別的思考から引き起こされたと繰り返しました。脱施設化が進む欧州各国から「**多数の障がい者だけが殺傷される**ようなことがなぜ起こるのか」という疑問が投げかけられました。同感でした。授業改善指導や研修講座の中で「多様性を前提にすることから始めよう」とそれまでよりも言葉を尽くしてきました。あれから10年が経ちました。「共に生きる、共に暮らす」は「共に学ぶ」が起点になる。世の中の平等・公平・公正について、学生の皆さんの感度が高くなるよう言葉を尽くしていきたいと考えます。



永野 美雄

これまで、横浜市の小学校に長く勤務してきました。学校では、教育実習生や新採用の先生を迎え入れる側でしたが、今回、國學院大學に勤務することになりまして、学生を送り出す側となり、思いを新たにしています。

教職支援室では、教職を目指す学生から様々な相談を受けて、助言を行っています。教壇に立つためにひたむきに取り組む姿に頼もしさを感じ、学生には是非とも夢をかなえてもらいたいとの思いを強くしています。これまでの教育現場のキャリアを生かして、熱意ある学生に対して惜しみない支援を届けたいと思います。

教育インターンシップ連絡協議会・報告会

経験からの学びを生かす

令和8年1月21日(水)、令和7年度教育インターンシップ連絡協議会・報告会を対面で開催いたしました。全体会では太田直之学部長から、教育実習前の経験としての教育インターンシップの意義と学生への指導に対して、受入れ校・園へお礼の言葉がありました。

その後、令和7年度教育インターンシップの実施状況の報告に引き続き、学生の実習報告と学校や幼児教育施設の先生方からの実施状況報告がありました。幼稚園実習について子ども支援学科2年の田邊結花さん、小学校実習について初等教育学科2年の百瀬楓香さん、中学校実習について健康体育学科2年の小山リーナさんが教育インターンシップの経験や学びをもとに報告しました。また各園や学校の実施状況について、横浜市立鴨志田第一小学校長の金田貴子先生、横浜市立あざみの中学校長の我妻智之先生、東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎主幹教諭の八木亜弥子先生から学生の実習の様子や今後学生に期待することなどのお話をいただきました。

そして第2部では、受入れ校・園の多くの先生方にご参加いただき、校種別に分かれた分科会を行い、「教育インターンシップの経験を教育実習にどう生かすか」のテーマのもと、先生方からのアドバイスを参考に活発な意見交換を通して課題や目標を明確にし、学びを深めることができました。

第17回夏季教育講座 教育実践フォーラムのお知らせ

テーマ

多様な子供たちの「深い学び」を

確かなものにするために

～「好き」を育み、「得意」を伸ばす～

日時 令和8年7月25日(土)

13:00～17:00

会場 國學院大學たまプラーザキャンパス

内容 ◆基調講演

◆分科会 ①保育・幼児教育

②国語

③理科

④音楽

⑤体育・保健体育

⑥道徳

⑦特別活動

⑧特別支援

申込み 國學院大學教育実践総合センターホームページ・チラシの申し込みフォームより申し込んでください。(7月21日まで)

教育インターンシップ連絡協議会

日時

第1回 令和8年7月14日(火)

第2回 令和9年1月21日(木)

会場

第1回 オンライン開催

第2回 國學院大學たまプラーザキャンパス

内容

教育インターンシップをよりよい活動や学びにするために、受け入れてくださっている学校・園・施設の先生方と活動の様子について情報交換・意見交換を図る。

今年度のスタッフ

◆教育実践総合センター

センター長 高山真琴

副センター長 山田佳弘

担当 河合優子 中野圭祐 萩野奈幹
見浦佳葉